

国内研修 研修成果報告書

1. 研修の概要

- ・研修先：一般社団法人 Colabo

＜一般社団法人 Colabo について＞

学校や家庭で居場所を失い、生活に困難を抱える若者に対する支援を行っている。「衣食住と関係性」を失った高校生世代の若者が、性搾取や違法労働の被害にあわなくて済む社会にするために、予防・対策活動を行っている。また、そのような困難を抱える若者の存在を社会に発信し、若者を取り巻く貧困や性問題について認知度を上げ、「若者が夢や希望を持てる社会」を目指して活動している。その活動の一つとして、「夜の街歩きスタディーツアー」を行っている。

- ・研修概要：Colabo が行っている「夜の街歩きスタディーツアー」に参加。これは、新宿、秋葉原などの街を夜の時間帯に実際に歩いて回り、現代社会の高校生を取り巻く現実やその周りにある性産業や違法労働の現状を見ていき、参加者の認識や気づきを広げることがを目的としたもの。

2. 研修を通して得た気づきや学び

今回、この研修に参加するにあたり、個人的に目的としていたことは、「JK 産業」や「性搾取」というような自分がまだ知らない領域の世界を実際に見て、現状を知ること。そしてそれを通して自分の視野を広げ、“偏見”を少しでも取り除くことであった。今回参加したスタディーツアーでは、新宿の歌舞伎町と秋葉原の二つの街を実際に歩いて回った。自分は今までこの二つの街にはあまり足を運んだことがない。ただでさえ自分にとっては「近寄りがたい街」だったからだ。正直に言えば自分とは違う世界の街だと思っていたし、特に用事がないなら行きたいとも思わない街であった。ましてそのような街で夜に働くなどというアブナイことは、自分にはできない、自分だったらやらない・・・そのように思っていた。先ほど述べた“偏見”とはこのような自分の中にあった思いのことを指す。しかしその街には、わたしよりも年の若い高校生がリアルに存在している。本来彼女たちがいるべき学校や家庭に居場所がなく、夜の世界に行きつくしかなかった女子高校生たちが実際にそこにいるのだ。まずは彼女たちの実際の姿を見たい、そして私が「別の世界だ」と思っていたその街と私自身が、実際にどう関係しているのか、それを確認したいと思った。

まずスタディーツアーは歌舞伎町からスタートした。経験のあるスタッフの後ろについて歌舞伎町を奥へ奥へと進んでいく。最初は人の波に押し流されないようにするのが精いっぱいという感じで、スタッフの方が「今あそこにスカウト（女子高生を JK 産業に勧誘する人々）がいたでしょ？結構たくさんいましたよね」などと解説してくださっても、自分の視界では全く捉え切れていないという状況だった。

しかしそれでも、ツアーを続けていくうちに、だんだん目が慣れていくのが分かった。普段なら何も意識せず通り過ぎていくであろう道を、注意を払いながら意識して歩いたことで、そこに様々な種類の人々がいることが分かった。複数の大学生がぞろぞろと連なって歩いていく様子は、おそらく普通の街中であれば少し異質な光景であるはずだ。しかしそれさえも溶け込んでいくのが歌舞伎町であった。それはおそらく、わたしたち大学生の集団なんかよりももっと多種多様なものがそこに存在していたからなのだと思う。飲み会に行く大学生や会社帰りのサラリーマンはもちろん、実際にJK産業の中で働く女子高生たち、彼女たちを雇っている大人たち。また、人だけではない。街に建っている建物なども多種多様であった。どこの町にもあるような飲食チェーン店のすぐ隣に風俗を紹介する店がある。普通のカフェと同じようにJK店員を売りにしたカフェが建つ。どこの駅にもありそうな人気アイドルの看板とあまり変わらない雰囲気、ホストの宣伝看板がそびえたつ。お洒落な美容院のすぐ近くに、違法ドラッグが販売されていた（現在も裏で販売していると思われる）店がシレっと建っている。しかしその街を歩く人にとっては、おそらくその光景が「普通」なものになっているのだ。お互いが自分の興味関心のある事柄以外のことには、全く興味を示さないかのように道を行きかっっていく。もしかしたら自分自身も、何も解説などを受けずにただ歌舞伎町を歩くだけだったら、実はそんなに違和感を覚えることなく歩いてしまうのかもしれない。それくらい、本来異質なものが溶け込み合っているところだった。しかし意識しながら見ればそれはやはり「異常」な光景であり、その異常な光景が「普通」になってしまっている現場であると分かった。そしてその中で、実は何人もの女子高生が息をしているのに、それが埋もれてしまっている・普通の風景になってしまっているということを実感できた。

次に訪れた秋葉原では、また少し違った情景を目の当たりにした。初めに訪れた歌舞伎町は、先に述べたように様々なモノの中に、性産業やJK産業、そして女子高生たちが埋もれている街であった。それに対し秋葉原は、どちらかという、埋もれているのではなくむしろ全面に押し出されているように感じた。秋葉原では、わたしたち大学生が、街に来た普通の一般人を装って、実際にJK産業で働く女の子たちに声をかけるという時間があった。勧誘をしてくる女の子たちと実際に話し、声を交わすという経験は初めてであった。話を聞いていると、JK産業の仕事がなんだか普通のことのように聞こえてくるのでとても不思議だった。しかしそのように私たちが話をしている間にも、ぞろぞろと色んな男性たちが実際に女の子と話をし、交渉をし、店に姿を消していく姿を目の当たりにしたとき、背筋が凍る思いがした。わたしたちは装って話しかけていても、彼らは実際に話しかけ、女の子を「買っていく」のだ。その現実を見た時のショックはとても大きなものだった。また、女の子たちに話しかける男性の中には、オジサン世代のみならず若手のサラリーマンのような人もいたことに驚いた。秋葉原の他の道歩いても、すれ違う男性が性産業の看板を見ながら面白

分に会話している声が聞こえてきたが、その会話をしている人たちも普通に会社で働いていそうな普通の男性たちだった。というか、本当に、昼間は普通に会社で働いている人たちなのだと思う。性産業、特に女子高生が商売の対象とされる性産業は、今は決して特別なものではなく、ある意味で大人の欲求を満たす選択肢の一つになってしまっているのだと思った。しかしそのように女子高生を「商品化」するということは、彼女たちの人権が完全に無視されているという状況に他ならない。それが社会の一部で当たり前で認められているということに大きな危機感を覚えた。

スタディーツアーを通して見た現実、当初の想像をはるかに越えて自分に衝撃を与えるものだった。しかし同時に、今までただ漠然と「アブナイ」「怖い」「良くない」と思っていた性産業やJKビジネスを、実際に「目で見ると」という経験をしたことで、上辺だけだった「怖さ」は取り払われたように思う。たしかにこの問題には、若者の貧困だけでなく日本の性モラルや、日本の学校の性教育の問題など、簡単には解決できない根が深い問題も関わっていると分かった。生半可な気持ちで女子高生たちを「助ける」ことなどできないと感じた。しかし同時に、自分が近寄れない世界ではないということも分かった。今まで、私にとっては関係の無い、もっと言えば「関係を持ちたくない」世界だった場所が、決して手の届かない世界ではないということ。むしろ、同じ学校や、将来の職場などに、性産業に客として関わる人がいないとは決して言えないということも分かった。また将来自分が家庭を持って、子どもを産んだとき必ず知っていなければいけない知識でもあることが分かった。

この研修を通して自分の視野が広がったことは間違いないが、それ以上に自分が今関わっている人、将来関わる人に、自分が学んだこと・見たことを知らせていかなくてはいけないと強く感じた研修となった。